

○同月有級者月次勝負の結果

三級へ 吉武吉雄、濱田精藏、佐藤文彌、服部清吉、高島一貫

二級へ 小寺源吾、吉堀誠一

一級へ 中村愛作、佐野甚之助

○十一月の無級者月次勝負の結果

幼年四級へ 渡邊源吾

四級へ 菅井與平、山田又司

三級へ 小泉浩

## 六 明治三十五年史

### (一) 寒 稽 古

寒稽古は一月十四日より開かれたが、午前四時といへば、未だ夜も明けやらず、吹きすさぶ寒風一入身に沁むに、嚴冬三句を通じて皆勤したる勇士左の如し。

中村愛作、吉田兵藏、秋山孝之輔、森本利三郎、吉堀誠一、盛田保三、大塚莊亮、杉浦壽作、大中圭介、(以上有級者)  
丸浦彦十郎、平岡規矩造、塚本太作、西川龜吉、神吉英三、稻村實章、島米八、中野榮三郎、小倉誠介、小川清、山中

福之助、濱田隆一、瀬良是助、上杉彌一郎、渡邊源吾、古川哲二、龍島新造、荒井武衛、大中宣之、井本茂一、高屋修三、中島重次郎、飯塚龍藏、齋藤衝平、早谷幸作、田代信一、西原久、林秀太郎、佐藤精一、河村四郎、植村傳、田宮弘太郎、福田龍、湯村藤助、松永干城、市村繁次郎、鹽田賢二郎、山口豊彦

## (二) 京都遠征

本年度の記録中、最も光彩を放つてゐるのは、京都遠征である。

我が柔道部の發達を健全ならしめ、部員の活動力を旺盛ならしむるには、外部との對校試合を敢行して、士氣を鼓舞すると共に、部員の團結を鞏固ならしめなければならぬといふ議論が、此の頃旺んになつて來た。その具體化されたのが京都遠征であつた。

從來我が部は、講道館其他諸校の大會には、その都度部員を派遣し來つたが、今回の如く選手擧つて外敵に當らんとするに至つたのは、之を以つて嚆矢とする。實に柔道部の歴史上劃時代的な事蹟である。

此の京都遠征の詳細は、幸にも堀切北東氏の精彩に富める筆に依りて描かれた左の一篇に残つてゐる。(編者)

### 堀 切 北 東

三田丘上軟風吹き止んで久し、然も硬風猶未だ競はず。之を内にしては、有爲多望の塾生、簿冊堆裡に頭を突き入れ、ペスタロジ―以來の教育の三大目的に背き、顔色憔悴して青瓢箪の如き者少なからず。之を外にしては、因襲の久しき、世上今尙我塾を以て華奢風流を事とする貴公子連の巢窟となし、動もすれば非禮を塾生に加へんとする者もありと聞く。

いざさらば起たんかな、吾が柔道部！ 颯起一番天下に、熱戦闘力の強大なるを示し、雙ペン先の徽章をして、いとも光榮あるものたらしめ、之に對して憚かる所あるを知らしめんには、今日を措きて何れの日にか期せらる可き。

聞くならく京都なる第三高等學校は、昨年金澤高等學校との試合に於て、美事なる勝利を得てしより、名聲俄かに關西に高まると。是れぞ我が屈竟の敵手なれ、加ふるに洛陽の地、山は緑に水は清し、あはれ王城の下に於て三田健兒の腕前を示し、兼ては過去、一年間の俗腸を洗はん哉。

四月二十三日 曇天

頃は卯月の末つ方、皆既月蝕後の朝まだき、涼風面を吹てそゞろに寒氣を覺ゆるの時、余は金澤世骨氏と打連れて、京都遠征の途に上るべく新橋の停車場に向ひぬ。到れば正に五時半なり。發車迄には尙一時間程もあれば、自餘の人々未だ一人も來り居らず、余等は氣味よくも木日の先登なりけり。例に依り一等待合に入りて待つ事少時、大塚補缺を初めとして戰士の面々相續いで來りぬ。見送の人々の中には古宮、横山、前島、時任、荒井、神山、佐竹、田中、松岡、時事新報社の宇之木の諸氏凡そ數十名あり。殊に神山氏は一行の爲めに蜜柑一箱を寄贈せられしこそ奇特なれ。六時二十分汽車新橋を發す。車中忽ちにして起れるは例の出陣の歌なり、其勢の猛烈なる同室の旅客中氣の弱きは肝を潰し目を廻して、他の列車に逃げ出すもありき。大船驛に達すれば、葦原雅亮氏は鎌倉より出迎へられて此行を盛にせらる。此間佐藤、大中、吉武の諸勇士元氣最も旺盛にして、詩吟、琵琶歌、其他口を衝いて出づ。静岡の鯛飯に一同飽喫して天下泰平を唱へ、三保の松原を日本三景の一と説明して笑はるゝものあり、矢矧橋上に蜂須賀小六が寝て居たと云ひて、新聞記者の記録に上るものあり、抱腹絶倒時の移るを知らず。名古屋を經、大垣を過ぎ、關ヶ原に近づけば、沿道の野邊時しも杜鵑花の花盛り、赤きあり白きあり、綠葉と相映じて其風流言はん方なし。彦根に至れば日は全く暮れ果てゝ、琵琶湖沿岸水の音もなし。九時二十分汽車は目指す京都に着しぬ。島津、森本、角の三先發、末廣、八木、小林の諸氏及び塾員麻生誠之氏等停

車場に一行を歓迎せられ、其周旋により余等は電車一臺を借切りて、直ちに三條小橋なる龜屋に向ふ。電車は單線の故なればにや、途中止まる事數次、氣早な坂東武者は皆徒歩よりも其進行の緩なるを嘲ければ、中には熱心に之を辯護する人もありけり。既にして龜屋に至れば、口八町の御亭主飛で出で、余等を迎ふ。然れども當時非常の雜鬧なれば、到底三十名に近き一行を容るゝの客舎なしとて、已むを得ず一部は一町程隔りたる旅館榭屋に案内せらる。茲に於て龜屋なる本部に止まるを得たるものは山下師範、中村、島津、金澤、大中、高橋、佐藤、濱田、向山、福澤、吉堀、森本、盛田、小中村、堀切の十五名のみ。十一時頃晚餐を濟ませ、一浴して今日の勞を休め、十二時半に至りて漸く床に就かんとすれば、こはそも如何に、幅廣き蒲團に枕は二つづゝ並べあり、蓋し夜具不足の爲め二人づゝ一處に臥せしめんとはするなりき。堀切、眞先きに其不都合を鳴らせば、中村、佐藤の諸氏之に應じ、亭主辟易して其命に従ひ、一同華胥の境に入る。

## 二十四日 雨天

午前六時頃なりけん、同室の佐藤に宛て電話を掛くるものあり、下女之を取次ぐ、然も何の事やらサツパリ分らず、且つ睡魔の尙去らざる爲め、分つた振りを爲せば、下婢辭し去る。後に至りて傍人に其意味を問ふも、誰も能く之を解せしものなし、佐藤頗る閉口す。既にして榭屋に至りし人々大舉して來り、其取扱の不行届を鳴らし、余輩の樂々と安眠するを見て、やけ腹となり、片つ端より起し始む。九時に至りて朝飯を濟ませたるも、今日は雨天にて都見物も爲し兼ね、遂に二階なる一室に團欒してネームコーリングを始む。龜屋の女將隣室より其聲を聞き、喧嘩なりと爲し、驚きて亭主に報じ其仲裁を求む。亭主依て走せ來れば、何ぞ計らん喧嘩すと見えし一族の人々の中より、一人二人欣々然として立ち上り、歌を歌ひ茶番を演じ、和氣霽々として一堂に滿つ、流石の亭主も茫然たりき。さらでだに物事に粗朴にして、無遠慮なる東男の大聲疾呼するを見て、コハ一大事よと肝玉を潰せる都人の誤解、さもありぬ可き事なりけり。午餐を終へ島津心舟を先導として、知恩院より清水寺を見物す。道路泥濘一行の困難名狀す可らず。知恩、清水の雨中の風光今更らに言はず、

前者の山門の二階によりて石川となん云ひける悪者の隠れたりと云ふ場所を見ては、誰やらにも見せたき心地ぞしける。  
(記者曰く南禪寺の誤りにはあらざるか。) 歸途小中村、吉堀の二氏共に足駄を切らせしかば、或人の發意により小中村の下駄の一方を吉堀に與へ、吉堀をして小中村を背負はしめて山門を下りしに、人々皆此小供らしからぬ小供が、老人らしき若者の背に在るを見て打笑へば、小中村も耐へ得ずして再び徒歩し、遂に人力車を求めて歸りぬ。余等は夫れより御幸町なる、とある町道場に至り、茲にて稽古を爲す。塾員横武、麻生誠之氏等も來られて余等の腕前を見らる。右了りて京極なる櫻湯に行き汗を流す。是れ頗る有名な風呂屋にして、規模廣大、湯深くして湯槽大なり、直立すれば温湯胸部を浚す。諸遊、金澤の大男連頗る難澁の色あり。

此夜高等學校より磯貝柔道教師及び柔道部理事井上初段挨拶の爲め來らる。麻生、諸遊、金澤、堀切、中村、島津の諸氏接待役たり。笑談、歡語、揶揄、辯駁、九時に至りて辭し去らる。此外講道館教師佐村三段大野二段も來られ、塾方の大將藤崎氏も九州より來らる。此日番組の交換もあり。

#### 廿五日 曇天午後霽

此日午前武徳殿に於て柔道稽古を爲す。武徳殿は前北垣知事の時、我國武術の益々隆盛に赴かん事を計り、廣く基金を中外に募集し、三年の星霜を経て初めて落成せしめたるもの、彼の小松宮殿下を總裁として奉戴せる日本武徳會の本據にして、洛東大極殿の西に在り、建築頗る宏壯にして優美、建坪二十三間に十七八間の大道場なり、正面には玉座の設けありて、場内は最も神聖視せらる。場の中央より左側にかけて五十六の疊を敷き連ね、柔道の用に供し、其右方は一面の板の間にして、擊劔の道場となし、之等の前後左右は二重三重に階段を設け、以て觀客の便に供す。誠に天晴天下の演武所たり。午後北野天滿宮より金閣寺に至り、仁和寺を見嵐山に向ふ。渡月橋の上流桂川、ボートを浮ぶる事凡て五隻。一同愉快を極めて歸途に着く。二條停車場より三條小橋に至る迄、二十有餘の人車を列ねて疾驅しければ、車聲軋軋として街

路を歴し、行人目を側てて、一行の壯なる行列を眺めぬ。

晚餐には京都同窓諸氏より寄贈されし牛飯の馳走あり、此夜本多親宗氏九州より馳せ來られたれば、一同益々其意を強ふす。

## 廿六日 雨天

午前八時床より出づれば、二階には早や例の軍評定盛なり。昨日の午後より漸く晴天よと見えし天候、又々一變して降り出したれば、人々氣鬱し快々として樂しまず、或は圍碁、將棋などに僅かに餘勇を洩すものあり。午餐には秋山氏の嚴君より寄贈されし牛乳を一同に配付す。午後榎氏麻生氏再び來られ、種々明日の心附など言はれぬ。終日室内に閉ぢ込められては、明日の元氣も如何あらんれば、皆々氣を晴らし、心を慰むるに如かずとなし、夕飯後打連れて寄席に行く。上方言葉の落語家喋々喃々と囀れども、殆んど其アクセントなき、エンフアサイズの不足なる、何んとしても眠氣を催さざる譯に行かず、加ふるに落し話に何と落したのやら夫れさへ知れず、此晩の先導北東子攻撃の矢を受くる盛なり。

十時歸宿、直ぐ床に入るも、明日の勝負の事など心に懸りて、容易に眠を成さず。細雨蕭々檐頭聲あり、枕邊の燈火光さやかにして、あはれ今夜二十餘名の戦士が、如何なる夢をや照すらん。

## 廿七日 曇天午後晴

午前九時起床、朝飯には鶏卵二個牛乳一合の外に、飯三椀を代ふる者は今日の豪傑なりき。午餐にも同じく鶏卵二個と牛乳一合の外には食慾更らに進まず。右了つて、一同勇ましく二條大橋を渡り、鴨川の左岸に沿ふて武徳殿に向ふ。午後なる約束の時間に先つ十分、至れば殿内見物人は既に充満せり、敵は何處と見廻せば未だ來り居らず、夫れより待てども中々に至らず、流石に都人の氣の長さよと驚嘆の聲を發する者もありき。漸くにして敵は來りぬ。依て敵味方一同武徳殿の正面に駢列して先づ紀念の撮影を爲し、次で高等學校は道場の左方に、義塾は其右方に各々陣取る。正面には前京都府



満面、兩手を張り廣げて虚勢を示すこと面憎し。秋山大内刈にて業ありしも、審判官は採らず、反てなつて居らぬ小外刈にて秋山の負はうたてし。福原氏益々得色ありしが、次で現はれたる本多に對しては、恰も鷹の前の雀のみ、立上りざま本多は御得意の左腰にて目の廻る程投げ飛ばす。本多は茲ぞ日頃の健腕を奮ふ場所と心得、續いて來る松尾氏を攻め立てて業あり、勢益々盛なりしが、其中腰の返しを食ひ、チト腰をつきぬと見るや、審判官は直ちに一本の聲を掛けぬ。味方は相顧みて齒嚙をなせども遂に及ばず。熟々事の有様を按ずるに、本多は其剛勇夙に三高にも響き居たるに加へ、今面のあたりに彼の美事なる勝利を得しかば、此で荒らされては一大事なりと、惘口なる審判官は早くも察せられての審判なりと、心の底迄見え透かされて憐れなりき。尙吾人の注意す可き事實あり。そは此取組に至るまで、味方は幾人となく「業あり」の掛聲に接せるに、敵には皆て業あるものゝありし事なく、何れも手あれば乃ち一本になる事なり。本多のやられたるを見て、流石沈勇の濱田もウヌとばかりに立上り、暫時もみ合ひたる後、巴投の晴れ業見事に極りて其勝となりしは今日の見物の一なりき。次で三高の藤木氏は、用心堅固に立合ひたれば、濱田の立絞め左腰共に残りて、二十分の引分時間を経過しぬ。

次に現はれし敵津田氏は六尺大の髭武者にして天晴屈強の勇士なり。此に對する我戰士は、やせ細りたる小男平野なれば、尋常一様の立合にては元より當る可くもあらねども、平野もさる者攻め來る強敵を右に避け左によけ、巧にあしらひて咽喉に行かんとせしが、力及ばずして押え込まれる。平野の働き振りを見て、流石は柔道の御蔭ぞと稱嘆の聲を洩らす見物人もありき。次で現れたる堀切は、義塾方第一の丈高なれば、此勝負如何あらんと敵味方の注目する中、津田氏は巴投を見せしも利かず、堀切はすかさず其虚を襲ふて袈裟固めに行き、津田氏は起き上らんと急れども力及ばず、遂に平野を破りしと同一轍を以て破られしは是非もなし。次に三高の野村氏、勢込んで攻め來り、其横捨身危かりしが、堀切は暫時其鋭鋒を避け居たる中、敵の右手に少しく隙あるを見出し、左に拂ひし拂腰見事に野村氏を倒しぬ。斯く二人迄投げ出さ



れて、三高の音に聞えし加々山氏は、ウヌと云はんばかりに出で來り、堀切の疲勞せるに乗じ、御得意の跳腰にて見事堀切を破る。次に吉堀は眞捨身業を出して加々山氏を攻め立て、加々山氏は又左の拂腰を振り廻す事屢なり。兩人共に丈高く男大にして、其取組今日中の大勝負なりけるが、遂に吉堀の負けとなる。吉堀に續ける佐藤は、武者振ひをなして飛んで出で、加々山氏の襟先を掴んで満身の力を込め、ウンと引附けて釣込腰に行きたりしが、殆んど背負投なりしかと見ゆるばかり、見事に加々山氏を投げ出しぬ。新宮氏亦苦もなく佐藤に破られしかば、三人目なる田中氏こゝぞ一大事と必死の勇を奮つて戦ひたりしが、遂に勝敗なく、之れ亦本日の大取組の一なりき。田窪氏に向山は、前者の横掛にて向山の體横に疊に觸るゝや、更に蠻力を利用して之を壓し潰しての一本は、近頃京都流行の手と見ゆ。田窪氏の勢中々に猛烈にして、更に小泉を投げ、金澤を倒しぬ。

此時迄道場内の有様を、睨一睨しつゝありし吉武は奮然として起てり。田窪氏の堅固なる自護體も物の數かは、十八貫の體量もてウンとも言はず押へ込みて先づ之を抜き、次で來る藤井氏は中々の業士にして、脊負投は最も御得意なりと聞きしが、吉武の勢に敵し兼ね、脆くも卷込にて敗らる。折田氏亦一撃の下に敗れ、吉武向ふ所敵軍風靡し、勇ましなんど云ふ許りなし。次で來る川上氏又跳ね腰にて苦もなく投げ飛さる。敵は今や頗る色めきて見えたりしが、五人目に表はれたるは其名の如き六尺大の大野氏にて、業あり力あり天晴の勇士なるが、吉武の爲めになやまされたるもの多きを憤り給ひ、齒をくひしぱり拳を握りて立ち向へば、吉武は大聲柔道に在りて拳を用ふるの無禮なるを呵責す。此より暫時龍攘虎搏の活劇なりしが、吉武敵四人迄投げ出して今は疲れ果て、遂に大外刈にて勝を敵に譲る。大野氏頗る得意なり。之に向ふ佐野、左の拂腰に行かんとすれば、大野氏は大外刈専門にて來り、右足を遙か前面につき出して佐野の右脚を劫し、佐野頗る危き所あり、彼は細く長く此は丸くして短く、恰も一大蟒蛇が眞紅の舌を吐きて蝦蟆に向ふが如く、其大外刈今か／＼と見物人をして手に汗を握らしむ。彼の剛壯並びなき吉武が、一意専心水天宮様を祈りきと云ふも此時にぞありけ

る。然れども佐野又無双の腕力家なりければ、共に取り疲れけん、遂に引分けとなる。栗山氏と島津は屈強の組合せなりしが、島津は過日來稽古中肩を痛めてありければ、其働自由ならず、十一分の苦戦の後大外刈にて敗らる。次で現はれたるは義塾の勇將中村なり、立上りざま横捨身をアビセ掛け、栗山氏を倒す、然も審判官は業ありと云ふのみ。次で栗山氏の大外刈少しく効あり、審判官直ちに中村の業を消えたりと云ふ。兩軍鋒を交へてより既に十七合に及びぬ。今日の勝敗全く此一戦に在りと云ふも過言ならねば、中村は奮戦激闘尤も努め、横捨身、腰投、跳腰交々出で、馬力(ウマリキと讀む)を振ふて攻撃せしかば、着々として其効を奏し、審判官は業有りを叫ぶ事前後三回合計二本半位にも成りぬ可し。然も何時迄も一本の聲はかゝらず、人々は審判官の顔を凝視するも、彼は酒々然として知らざる者の如し。斯くして時は早くも二十分の引分けを報じぬ。

次で現はれたるは、王城第一の剛の者として其名ある那須氏なりしが、此方は又敵の御大將まで投げ飛さんとする高橋初段の事なれば、那須氏は其腕力も施し得ず終始守勢を取り、道場の眞中に膝付きて睨み比べに七分間を費し、夫れより立ちては座り、座りては立ち、那須事もなくして引分けとなりぬ。此を素人目より見れば、誠に面白からぬ勝負なりしも其虚々實々互に機先を制せんと欲して工夫を凝したる様、黑人には天晴の取組と稱讚せられぬ。次に道場に現はれしは敵の副將、初段、高等學校理事井上氏なり。氏は演說辯論の嗜みも淺からずと見え、終始我軍と高等學校との間に於ける外交上の掛引に當り給ひし人にして、日頃は文科なるいとも優しき學の道に心を掛けられ、誠に文武兩道の達人にて、豫ての晩に北東子が褒めそやしたる君にぞありける。此に手向ふは同じく我副將大中圭介とて、武骨一天張の荒武者なり。此勝負如何と見てあれば、大中立上りざま左手に敵の袖口を握り、右手も同じく其右襟を取り、二足三足後方に引附くるや、電光石火御得意の横捨身は、井上氏の右足にかゝりぬ。其早業に何かは以てたまるべき、井上氏の身體あはれ微塵よと見えけるに、其勢餘りに猛烈なりければ、井上氏は二三間右手に飛んで、敵の戦士の眞只中にドツと許り投げ出されぬ。さ

れど幸に人々の群がる中なりければ、幸に背をつかず辛くも残して又々立合ひ給ふ。今回は井上氏捨身を見せ、御得意の咽喉に行かんとすれば、臥業にかけては何れ劣らぬ大中充分に敵を近付け、先づ兩脚を以て敵の利腕を殺し、續て襟袷に行きけるが、其今迄外部に開きたる兩手急に内部に閉づよと見る間に、井上氏は喘々焉として白泡を吹き初めぬ。然も愛校心強き審判官は、尙一本の聲をかけず、さらばこれ迄と今一息絞め附くれば、遂に美事井上氏は黄泉の下迄旅立たせ給ひてけり。次で来る川勝氏は敵の大將軍にて、前回京都諸學校との聯合試合には、四人まで敵軍を抜きたりと云ふ強の者なるが、大中少しも屈せず、獅子奮迅の勢凄まじく攻め戦ひけり。見物人は片唾を呑んで見てありしが、勝負容易に決せざるに時は早くも二十分を過ぎぬ。警鈴掛の傍に在りし諸遊初段は引分時間なるを注意しぬ、敵の役員はまだ十五分なりとて聞かず、諸遊心に期する所あれば深くも争はず、更に五分を経て川勝は足拂を試みぬ。此時早く彼時遅く、大中は之を外づして巴投に行きぬ。審判官は一本と叫びぬ。不平は起りぬ。そは起る可く正當なるものにてありき。審判官は顔赤らめながら辯解せり。吾軍は再び深くも争はず、どこ迄も審判官の宣言を尊重せるは、實に三田山上多年養はれたる高き氣品の發動にして、よしや相手は如何に陋劣を極むとも、我はゼントルマンライキならざる可らずとの觀念が、油然として湧き出でしに依りてなりき。残るは共に大將のみ。此一戦實に今日の限りの勝敗なれば、共に大事に大事を取りて組合ひたるが、如何なる隙を見出しけん、藤崎は巴投を見せ敵は危く残しぬ。其働きの早さ加減殆んど目にも留らず、人々の稱讃を價せり。次で川勝氏の小外刈に藤崎の身體斜になると見るや、審判官は又々一本と叫びぬ。斯くの如くにして満場の拍手喝采の中に、勝利の月桂冠は敵軍の頭に落ち、兩軍の戰士は互に一揖して今日の勝負は全く終りぬ。

夫れ負けるも勝つも時の運、成敗利鈍元より物の數にはあらねども、輝ける勝利の希望に勵まされ、雲煙數百里の外に遠征して、昨日迄は否此瞬間迄は、凱歌の外に更に餘念もあらざりしに、今や一朝にして此敗亡に遭ふ。敵軍の揚々たる顔色を見ては、無念の涙抑へ切れず、鬼をも拉がん丈夫共、人知れず稽古着の袖を露しけるぞ悲しかりける事どもなり。

右了つて高等學校にては、遠路來京の吾人を犒はんが爲め、同校内に招待せられて茶話會の催あり。今迄は敵となり味方となりて、必死に戦ひたりし戰士等、今や一堂に手を採り膝を交へて放言高笑す、心の裡こそゆかしけれ。高等學校の理事の一人は設けの演壇に立ちて、開會の辭を述べられたるが、斯る事には不慣なる人なりしと見え、作文の草稿を暗誦するが如くに氣焔上らず。次で我金澤世骨は演壇に上り、一場の挨拶を爲しぬ。氏は今回の遠征の目的、此より得たる利益、高等學校の歡待に對する謝辭を徐々に述べ立て、最後に東西の此二校昨日はベースボールに於て顔を合せ、今は柔道に於て相見えぬ、因縁決して淺しとなさず、自今庶幾くば、彼の日英同盟の如き親密なる交情を此二校の間に保たれたしと云ふや、拍手喝采は雷の如くに場内に起りぬ。今日の世骨の演説振り、氣焔萬丈、義塾のベキュリアリテーを發揮して遺憾なし。流石に大厦の倒るゝを、一木もて支ふる義塾唯一の政治科生よと、人も吾も稱讚しぬ。

茶話會了りて、互に萬歳を交換し、一同は三條小橋の寓に歸りぬ。主人は酒食を供へて懇ろに余等を待てり。茲に山下師範は余等に告げられて曰く、今日の戦敗知る人ぞ知らん。諸君は決して悲しむに及ばず、彼の敵の取口の始終殆んど柔道の價値もなきに反し、味方は見事なる姿勢を維持して攻め戦へる様、余は負けたりと雖ども肩身の廣きを感じるなれ、余は偏に諸君の勞を多とせざるを得ずと。日頃部員が父とも慕ふ師範の此慰撫の言葉を聞きて、今迄は耐へに耐へし吾身さへ、今日の無念さ今更に思出だされ、嗚咽の涙は滂沱として下りつ。

二十八日晴天、二十九日雨天、三十日晴天

此日より三十日午後迄は、戰士一同思ひくに行樂するの自由を與へられぬ。茲に於て或は神戸大阪の地に向ふ者あり或は洛中の名所舊蹟を更に見物する者もあり、或は比叡山、大津、三井寺、南都等に向け遠征を續ける者もありしが、期せる卅日の午後迄には何れも本據地に歸りければ、茲に知己朋友に別れを告げ、更に再會を期して同日九時七分の汽車に搭じ、記憶す可き京都の地を去りぬ。火車の進行矢の如く、明くれば五月一日午前十時、品海の波、愛宕の山、笑て我等

が一行を迎へぬ。(口繪参照)

### (三) 第一回對早稻田大學柔道(聯合)試合

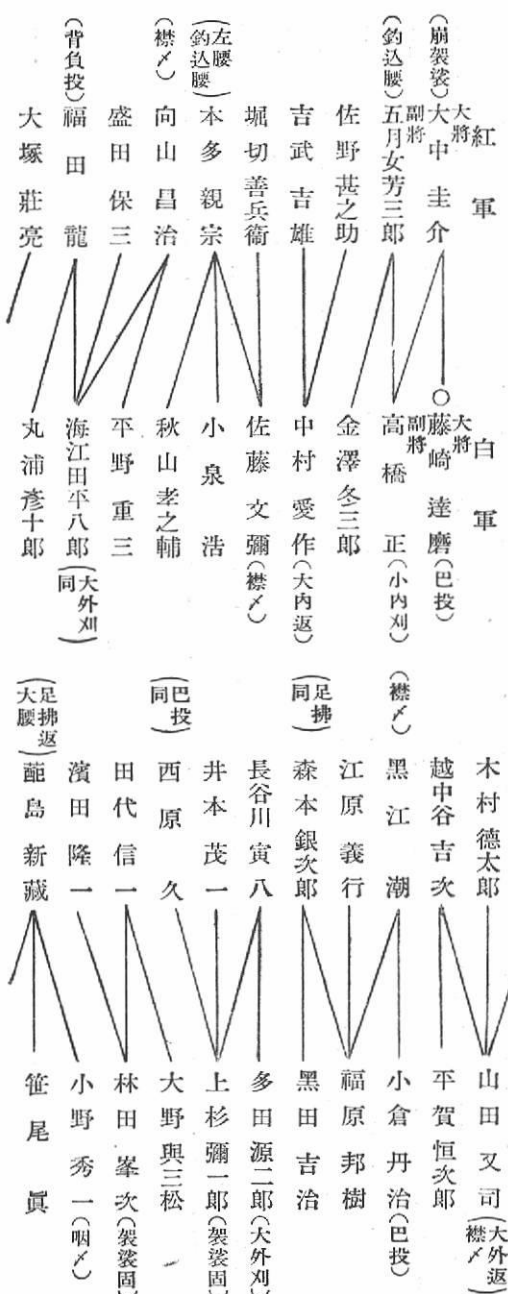
前記京都遠征は、遠征としても亦對校試合としても、實に我が部の最初のものではあつた。優れるとも劣らざる實力を有して、而も審判に敗れたる我が全軍の士氣餘勇は、更に強敵を迎へて之と一戦を交へずには止まなかつた。その好對手として見出されたのは、都の西北に陣營を張る早稻田大學であつた。

京都より歸來旅裝を解く暇もなき六月八日、東都私學の兩雄は、遂に三田臺上に相見えたのである。當時早稻田は三段二名(前田榮世、佐竹信四郎)二段一名(松代林太郎——間もなく三段となる)を有してゐたが、慶應には初段以上の者は居なかつた。それで大將には兩軍共早稻田の二段三段を据え、下の方にも戰士を互に混ぜ合せた取組が作られた。随つて名は聯合であつたが、併し副將以下中堅が早慶相分れてゐたから、その實對校戦たるに變りはなかつた。双方三四十名宛。早軍は二段松代氏を大將とし、初段河野威太郎氏之に次ぎ、慶軍は三段佐竹氏と初段藤崎達磨氏とが、大副將であつた。取組進んで最後に松代氏の奮闘目覺しかつたが、我軍の副將藤崎氏出でて同氏との對戦となり、臥技立技秘術を盡して戦ふこと四十餘分、足拂返しのその又返しを以つて、藤崎氏の勇戦能く敵將を打止めたのであつた。唯往事恍として詳細を説く能はざるを憾みとする。(口繪参照)

### (四) 秋季紅白勝負

十二月十六日の紅白勝負は、八名に餘る有段者と數十名の若武者の對戦であつて、斯かる偉觀は道場始まつて以來のこ

となれば、部員諸氏の意氣込は勿論、塾の武道熱心家は朝早くより犇々と詰めかけ、場内殆ど立錐の地なき程であつた。優勝旗を中心として、之を争ふ兩軍の勇士を見渡せば、先づ白軍の大將は、曩に早稻田専門學校と聯合紅白勝負を催せし時、一方の副將をつとめ、見んごと敵の大將を倒したる、塾中にその名も高き藤崎にして、副將高橋を始め、金澤、中村、佐藤、小泉、秋山の面々之に隨ひ、白旗の下に思ひくりに陣取れば、對手の紅軍は、今春京都第三高との試合に、副將として京童の膽を寒からしめた天晴れの剛の者大中を旗頭とし、副將五月女、之に續いては佐野、吉武、堀切、本多、向山等の若武者居並び、皆勇氣凛々血も亦爲めに湧かんとするの有様である。この勇ましき晴れの合戦に、島津、濱田、吉堀の三氏負傷の爲め出陣の適はなかつたのは氣の毒であつた。



(横棄身)齋藤 衡平 (足拂) 永井 好男 (袈裟固) 西川 半次郎 (同)

瀬良 是助 荒井 武衛 岩橋 新一郎 小山 萬吾

大 中 宣之 (背負投) 早谷 幸作 大井 博 (小外刈)

(袈裟固) 山口 峻 渡邊 源吾 春日井 佐吾一 伊藤 一郎 (袈裟固)

佐藤 精一 (足拂) 田村 市郎 中村 金太郎

市村 繁次郎 山中 福之助 松永 干城 遠口 直次郎

渡邊 茂 鹿島 一郎 (大外刈)

「午前九時、先づ舊部員諸遊慎吉氏審判の下に、戦端は開かれたり。第一番に現はれ出でたるは、紅軍の松永干城、白軍の遠口直次郎の兩氏なり。何れも幼年組の若者にして、其の小さき體軀を以て、縦横無盡に奮戦せしが、互ひの力や等しかりけん、終に引分となる。續いて現れしは、紅軍の田村氏白軍の中村氏なり、田村氏の足拂見事に功を奏し、一撃の下に敵を屠る。此勢を見て進み出でたる白軍の伊藤氏、己れにつくき紅軍め、目に物見せんと逸り出し、僅か三分を以て袈裟固に斃し、次なる春日井氏をも同じく袈裟固を以て抜きければ、残念なりとて飛び出だしたる紅軍の早谷氏、見ん事背負投を以て敵を射止めしも、己は大井氏の小外刈に敗れ、大井氏は岩橋氏と數分争ひしが、何れも互格にて引分となる。白軍の小山氏紅軍の永井氏に倒れ、白の西川氏袈裟固を以て永井渡邊の二氏を破り、此勢を以て猶も敵の數人を薙ぎ倒さんとせしが、幼年紫帯の市村氏、巧に敵の鋭鋒を避け、十分を以て引分けとなりしは、中々に御手柄なりき。次に紅軍の佐藤氏は、體軀と云ひ膂力と云ひ、適れの強者なりしかば、白軍の鹿島氏力を以てしては兎ても對戦覺束なしと、右に開き左に避ける其内に如何なる隙を見出しけん、大外刈にてすつぽり佐藤氏を投げ伏せたり。紅軍の山口氏出でて、苦もなく袈裟固を以て鹿島、山中、青木を破り、續いて來りし白軍の若武者渡邊氏をも、一撃の下に斃さんとせしも、流石は

幼年の業士を以て其名を轟かせし源吾なり、小兵なれども常々鍛へ上げたる輕妙の技倆は、圓轉滑脱寸隙だもなし、流石力自慢の山口氏も施すに術なく、終に十分を以て兩者互に引上げたり。次は紅軍の大中氏、足拂もて白の神吉氏に倒れ、續いて來りし瀬良氏之と引分となる。白軍の荒井氏は紅の齋藤氏の横捨身に無念の戦死を爲、中島氏出でて、背負投に之が仇を復せしが、忽ちにして紅軍の葩島氏の大腰に破られ、葩島此勢に乗じて苦もなく足拂返をもて笹尾氏を倒し、尙も進み出でたる小野氏を一攫にせんと逸りしが、此の小野は體軀こそ小なれ、膽飽く迄太く、物々しきは紅軍の振舞かな今に見よとて機を窺ひ、飛鳥の如く飛び掛り、見事喉絞を以て敵の首級をあぐ。次に紅軍に現はれしは、業と云ひ體と云ひ、將來望を屬されたる幼年の濱田氏なれば、小野も是には少しく勇氣碎け、終に引分に終る。紅軍の田代氏は白軍の林田氏と闘ひしが、後者には敵し難く袈裟固に倒るれば、紅軍より飛び出したる西原氏、好敵御座んなれと二合三合揉み合ひしが、見事得意の巴投もて之を投ぐ。林田氏這々の態もて退けば、大男の大野氏進み出で、又々巴投にて無殘の戦死を遂げしが、續いて來る白の上杉氏、苦戰數合袈裟固を以て紅を打ち止め、次の井上氏と引分けとなる。新たに戰場に名乗を上げしは、紅軍の長谷川氏と白軍の多田氏なり。此一番こそ當日無級者中の大立物なり。長谷川氏は今こそ衰へたれ、數年の昔は精銳の強者と、自らも頼み人も許せし老武者なれば、力自慢の多田氏とて何程の事かある、我れ縱令老いたりと雖も、空しく敵に首を渡さんやと勇み出でしが、愈々當りて見れば話に優る多田氏の怪力、流石の老武者先刻の元氣も何處へやら、攻めにく攻めたてられて自護體となりしは、誠に氣の毒なる程なりき。それでも最後の一思ひと、是れ見よがしの大外刈を施せしが、氣のみ焦りて業の伴はざりし無念さよ、見る／＼内に返へされて、無殘の戦死をぞ遂げにける。之が仇討として出で來りし紅の驍將は、これなん銀次郎森本氏なり。足拂もて容易く多田氏を破り、破竹の勢同じ業にて老武者黒田氏をも難なく屠り、福原氏と引分けを爲したる拔群の働きには、敵も味方も感ぜぬ者はなかりけり。時既に正午を過ぎたれば、是にて勝負は一先づ中止となる。



「午後の勝負は、白軍側早や有級者となりしが、紅軍には尙ほ二名の無級者の在るあり、知らず如何なる勇者の出で、此の類勢を挽回すべき。山下師範の審判の下に、又々勝負は開始せられたり。最初に出でたる白軍の小倉氏、難なく巴投もて紅の江原氏を倒せしが、續いて現はれし黒江氏は中々の剛の者、裸絞にて此の有級者を破り、一舉して血氣に逸る平賀氏をも斃さんとせしが、平賀氏も左る者、己れ無官の太夫に敗れては、後の世までの耻辱なりと、双方負けず劣らずの大戦ひ、終に共に得る所なく引分となる。これよりは有級者同士の闘ひなれば、定めし目醒ましき立合ならんと思ひしに、紅の越中谷氏僅か三分にて、白の山田氏の襟絞に無念の戦死を遂げしは、誠に物足らぬ心地ぞせらる。斯くて山田氏獅子奮迅の勢もて、幼年組の名將木村氏を大外刈にて抜き、次なる大塚氏をも粉微塵になし呉れんと逸りしが、機敏なる大塚それと見て取るや、己れ白軍の木片武士物々しき振舞かな、我が背負投を知らざるかと、双方互格の勢にて甘分間も揉み合ひしも、終に引分けとなる。次は白の丸浦氏對紅の福田氏なり。福田はこれ迄の戦に常に敗北のみを重ねしかば、今日こそ會稽の恥を雪がんと鎬を削つて渡り合ひ、遂に丸浦を背負投もて投げ出したるは、實にも眼覚ましき働きなりき。次に白軍より跳り出したる血氣の若武者、見れば體軀頗る短小なれども勇氣滿々、全身是れ膽とも評すべき九州男子平八郎海江田氏なりき。二三合の後大外刈もて福田を倒し、續いて來る盛田氏をも、大外刈もて返り打ちとなしたり。さて平家の陣より現はれ出でたるは、幼年組に其人ありと知られたる、當代の業士昌治向山氏なり。是には流石の平八郎も、殆ど持て餘しの體なりしが、今日の向山氏は日頃の勇氣もなく、常に守勢を取りしは、望む敵手に非らざりしが爲めか、將亦死を決して攻め立てし海江田の鋒先鋭きが爲めか、最後の裸絞辛ふじて其功を奏したり。之が仇打として出で來りしは、是も幼年組の業士として、其名も高き年少剛毅の重三平野氏なりき。業士と業士との戦ひなれば、これぞ定めし當日第一の見物ならんと、何れも手に汗を握りて此の勝敗如何にと待ち受けしが、兩士が己の責任を重んじ過ぎてか、案に相違して業も出さず、全く別人なるかの感あらしめたり。斯くて兩士の引分けとなるや、白軍より勇み出でたるは秋山氏にして

紅軍より沈重なる態度にて、物思はし氣に進み出でたるは本多老将なりき。秋山氏交戦未だ三合ならざるに、早くも本多氏より挑まれたる釣込腰の爲めに脆くも敗れ、次いで現はれたる小泉浩氏は、勇氣勃々得意の左腰を以て無二無三になぎ立てしが、流石は斯道の熱心家なる本多少しも騒がず、前に釣り後に押し、右に飛び左に變じ、虚々實々悠然として迫らざる中に、突如電光石火の勢を以て打ち出したる得意の左腰に、小泉氏あへなき最後を遂げにけり。代つて飛び出でたる文彌佐藤氏は、蠻勇家と異名を取りたる程の腕力家にして、例の左大外刈を以て敵を倒さんとせしが、本多氏も然るもの相手の奇略を見て取るや、常に守勢もて之に當り、暫くは何時果てんとも見えざりしが、本多氏の倒れしを幸ひ、攻め立て、遂に佐藤氏の襟絞功を奏しぬ。此時紅軍の中より悠々と立ち出でたる偉丈夫あり、これなん身長本部第一を以て推されたる堀切善兵衛氏なり。勝ち誇りたる佐藤氏を物ともせず、左體落もて之に當りしが、少しく力の足らざりけん業ありの一聲のみ。さては残念今一發と躁れども、今度は佐藤氏も烈しく戦ひ、十二分にて引分けとなる。是にて白軍は愈々無級者終りて有段者となれり。

『最先に白軍より靜々と打ち出でたりしは、新進の初段中、日の出の勇士愛作中村氏なりき。面貌の優しきに似ず、力能く馬をも挫く剛の腕力、業は幼年時代より鍊へ上げ、加ふるに體軀偉大にして筋骨逞しく、將來有望の戰士なり。時しも紅軍の陣頭より、悠然として立ち現はれしは、柔道部に其人ありと知られたる偉丈夫、筋骨と云ひ體軀と云ひ、膂力と云ひ、中村氏に匹敵すべき吉雄吉武氏なり。氏は今春京都對抗試合に、大の男を續け様に四人迄も投げ倒し、關西に雷名を轟かせし程の剛の者にて、今日は殊に立派なる武者振りなりき。双方火花を散らして戦ふ中、吉武氏の大内刈見事功を奏せしかと思ふ間もなく、流石は有段者の中村氏。如何なる寸隙を見出しけん、之が返へしと打つて出でぬ。膂力飽くまで強き吉武氏も、何條是を支へ得べき、五尺六寸の大兵忽ち戦場の露と消え果てしぞ無殘なる。白軍の歡聲天地に震ふ折しもあれ、不俱戴天の仇を打ち取りて、武運拙なかりし我が驍將の魂を慰めばやと、勇み出でたる沈勇決死の若者は、之れ

なん問はずして知る白軍の中村氏と譽れ等しき甚之助佐野氏なり。何れ劣らぬ新進初段の兩勇士、互に秘術を盡して闘ふ有様は猛虎嘯いて風を起し、蛟龍躍つて雲湧くが如く、其の壯觀觀る者をして想はず手に汗を握らせ、滿場寂として聲なし。斯くて佐野氏は屢々中村氏より挑まれたる得意の跳腰も難なく之を拂ひ除け、さつとばかりに中村氏を中天に抱き上げしが、それにかけては妙を得たる中村氏、苦もなく體を元の位置へと引き戻しぬ。かゝる間にはや時も過ぎ行きたれば再戦を約して各々陣へと引き返へしたるぞ勇ましけれ。次に現はれし白軍老功の士冬三郎金澤氏、一舉に敵の副將五月女芳三郎氏を倒さんと、身を飛鳥の如く突撃し、一進一退虚々實々、有らん限りの秘術をもて之に當りしが、遂に釣込腰に名譽ある戦死をぞ遂げたりき。斯くなる上は仕方なし、いでや我が力試めさんと、進み出でしは白軍當日の副將正高橋氏其人なり。何れも副將の事とて、其地位を案じつゝ能く戦ひ能く防ぎしが、五月女氏は先刻の戦に疲れしか、體漸く崩れ掛れり、之を見て取りし高橋氏此の機逸す可らずと採みに採みて攻めたて攻めたて、小外刈もて七分の勝を制し、尙續いて小内刈もて之を斃しぬ。次はいよゝゝ紅軍の御大將大中圭介氏なり。氏は體軀の小なるに似ず、其業巧妙にして、數度の戦に數限りなき武功を立てし老練の強者なるが、今日は己れの責任の重きが爲め、意に任せて其技を施すこと能はず、然るに一方高橋氏は、我れ縱令武運拙なく戦死するも、尙ほ味方には大將のあるあり、もし幸にして之を斃さば、當日の月桂冠こそ我が頭上に落つると思へば、心も自ら勇み立ち、攻めたて攻めたて敵の陣へと進みける。斯くて二十六分に互りて戦ひしが、大中には敵はで遂に崩壊裝固もて空しく戦死せるぞうたてき。さて白軍の大將藤崎達磨氏、悠然として源氏の本營より進み出づ。紅將大中氏先刻よりの戦ひに氣息漸く逼り、我は今戦場の露と消え果てんも、何の怨む所なきも唯氣の毒なるは我黨の將士なり、さりながら事茲に至りては悔ゆるも詮なし、如かず運を天に任せて、我が力の及ばん限り敵と戦ひ、刀折れ矢盡きて後戦死せんのみと、堅く心に誓ひつゝ進み出でたるぞ勇ましけれ。之に引き換へ白將藤崎氏は新手の精銳なり、之を見て物々しき敵の振舞かな、いで一打にとサツと掛けたる巴投、能く其功を奏し、さしもの驍將

宙を飛んでぞ倒れける。是を見たる白軍の將卒狂せんばかりに歡呼し、萬歳の聲場に滿ち天地も崩るゝばかりなり。此時山下師範白軍の大將藤崎達磨氏に優勝旗を授け、是にて世は暫し源氏の時代となりぬ。』

## (五) 雜記

### スラヴキン氏の拳闘演技

三月七日横濱に滞在中なる濠洲の拳闘家スラヴキン氏を聘し、運動場に於て其技を演ぜしめた。此の事を聞き傳へて、正午頃より見物人の來るもの雲霞の如く、時の名力士荒岩などもやつて來られた。聽て午後二時となるや、スラヴキン氏は横濱アマチュア俱樂部員トンプソン氏と相携へて拍手裡に登場し、三分間打合つて二分間休憩し、斯くて三回を續け、更に同俱樂部員チャルスウェイツ氏を相手としたるも、毫も疲勞したる模様なく、綽々たる餘裕を以て、此度は曾て横濱に於て氏と戰ひて不覺を取りしルシファ氏と立合ひ、能く拳闘の秘術を示し、前後二回の試合を了りたる後、ルシファ氏は獨特の曲藝を演じて、身體各部の操縱輕妙自在を極め、何れも其妙技に感歎せざるはなかつた。右了つて、先方の請ひに應じ、金澤、大中、平野、向山の諸氏、柔道の形を示して散會した。

然るに唯拳闘を見た丈けでは面白からず、一つ柔道對拳闘の試合を催して、我が武道を示さうといふ議が持ち上つた。愈々話が進んで、先方では塾の教師クラーク氏をマネージャとし、こちらは山下師範を介添役とし、今の飯塚師範が柔道家を代表して、其五尺一寸の短軀を提げ、六尺以上のスラヴキン氏に立合はうといふことになつた。さて何日何時新富座に於て、兩者の大試合を行ふこととなり、試合の條件までも決めたのであるが、ス氏は柔道との試合を怖れてか、遂に其約を履まず、三十六計を極め込んで、こつそり船出して了つたのは、今に残れる一つの笑ひ話である。

## 幹事更迭

多年幹事として後進を指導せられたる初段諸遊慎吉氏は、愈々本年四月を以つて日出度卒業せらるゝに付、其の後任として、斯道に熱心にして、且つ塾中俊英の名高き堀切善兵衛氏を推薦し、同氏の就任を見るに至つた。

## 有段者の入塾

昨年は初段高橋正及び藤崎達磨兩氏の入塾を見たが、本年第二學期に至り、更に初段五月女芳三郎氏の驍將を得、柔道部は益々其の勢力を充實することになつた。

## 部員派遣

本年度中試合の爲め各學校へ派遣せられたる者左の如し。

- 十一月二十二日學習院へ 大塚莊亮、向山昌治、福田龍、秋山孝之輔、中村愛作
- 十一月三十日早稻田大學へ 小泉浩、金澤冬三郎、中村愛作、藤崎達磨
- 十二月六日帝國大學へ 堀切善兵衛、高橋正
- 十二月七日高等師範學校へ 吉武吉雄、佐野甚之助

## 進級一括

○第一學期の中頃講道館より左の四氏に出頭すべしとの通知ありたれば、當日打揃うて登館せしに、嘉納師範より初段に

昇進せしむとの沙汰があつた。

金澤冬三郎、佐野甚之助、中村愛作、島津理左衛門

○第一學期の終りに催されたる月次勝負の結果

幼年三級へ 大塚莊亮、平賀恒次郎

幼年二級へ 向山昌治

四級へ 小川立太郎、塚本太作、鹽田賢二郎、橋本玉次郎、高屋修三

三級へ 山田又司、海江田平八郎

二級へ 盛田保三、松岡正男、秋山孝之輔、吉田兵藏

一級へ 堀切善兵衛、吉堀誠一、濱田精藏、佐藤文彌、小泉浩、吉武吉雄

○十二月の紅白勝負の結果

幼年四級へ 西原久

四級へ 森本銀次郎、井本茂一、上杉彌一郎、黒田吉治、福原邦樹

三級へ 丸浦彦十郎、福田龍

二級へ 海江田平八郎

一級へ 本多親宗